

# 世界旅打ち気分

●第14回・昔のUAE

須田鷹雄

写真のカラー版は  
<https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/>の  
#グリーンファーム会報#2019年4月号  
でご覧いただけます



左がオリジナルスタンド、  
右がミレニアムグラウンドスタンド



ナドアルシバ時代の開催風景  
(01年ドバイワールドカップ)



01年のシャルジャ競馬場パドック風景

<https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/>

この連載は「世界旅打ち気分」というタイトルだが、今回は「打たない競馬場」を題材にしたい。舞台はUAEである。

なんとなく「ドバイ」と呼ばれる彼の地の競馬だが、ドバイというのはUAEを構成する首長国のひとつ。アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマーン、ウムム・アルカイウィン、フジヤイラ、ラアス・アルハイヤという7つの首長国によって国が形成されている。このうちアブダビやシャルジャにも競馬場はある。

筆者がはじめてUAEに行ったのは1997年。その当時に近い、発展前のUAE競馬について思い出話してみようと思う。もちろん話のメインはドバイである。

いまでも世界最高レベルの高層ビルがヨキヨキと建つドバイだが、97年当時はまだ高層ビルがほとんど無かった。デira地区というダウンタウンに多少の高級ホテルがあり、あとはドバイワールドセンターという白いビル(いまでもある)が建っている程度。いまのトレードセンターは高層ビルのうちに入らない程度だが、当時は圧倒的なランドマークだった。その頃プレ

スのホテルだったヒルトンはトレードセンターの横にあったが、僅か4階建てだったと記憶している。

当時ドバイワールドカップが行なわれていたナドアルシバ競馬場は収容人数数千レベルのスタンドがひとつあるだけ。上層階にVIP用のフロアがあることはあったが、いまにして思えばよくあのスタンドで高額賞金レースをやっていたものだと思う。プレスセンターをスタンドに作る余裕はなく、大きな仮設アtentを設置していた。また内馬場を中心にゴルフ場と合体したような設備になっており、ゴルフ場のクラブハウスが関係者やプレスの朝食会場として毎日利用されていた。

規模が拡大されたのは2000年。旧スタンドよりコーナー側にミレニアムグラウンドスタンドという新設スタンドが作られた。サイズそのものは旧スタンドとそう変わらないのだが、フロア数とスタンドそのものの容積が大きかったため、だいぶ規模が拡大されたと感じたものだった。

調べてみると、私のパソコンに保存されている写真は翌年、01年のものが最古だった。それ以前

も写真は撮っていたはずなのだが、まだデジカメではなくリバーサルフィルムだったので、どこかのタイミングで廃棄してしまったようだ。

01年はドバイシーマクラシックをステイゴールドが勝った年。まだG2時代だが相手がファンタスティックライトだったこともあり、日本人は誇らしく感じたものである。レースとしては現在行なわれているものうちアルクオズプリンとドバイゴールドカップは存在しなかった。ドバイターフはドバイデューティフリーというレース名であり(これはごく最近の14年前)、距離も芝1777mという半端な距離だった。

さらに思い出話をすると、そもそもドバイワールドカップが創設された当時、ドバイデューティフリーはダート2000mというワールドカップと同じ条件で、ワールドカップの出られない馬が出るレース(当時はG3)という扱いだった、それが芝になって3年目からG1格を得たのである。この時期のドバイデューティフリーは名レースが多く、ジムアンドトニック・フェアリーキングブロン・サンラインが三つ巴の激戦を演じた01年は、勝った

ジムアンドトニックの厩務員がコース上で号泣した姿が印象的だった。03年は、シバエ産馬のイビトンビが3馬身差の圧勝で、世界の競馬にはまだまだ伸びしろがあるのではと感じさせた。

このころ、プレス向きに行なわれていた定番イベントが2つある。ひとつはゴドルフィン・ブライベートステープルであるアルクオズステープルの見学会。「シエイク・モハメド」が持ち馬を見せびらかす大会のような調教見学会で、参加者には高額の時計がお土産として渡されたりと、パブル感満載のイベントだった。シエイク・モハメドがすぐそこについて、気軽に話しかけたりもできる貴重な機会でもあった。

もうひとつは、01年時点だともうなくなっていたかもしれないが、ラクダレースの見学会。いまでもメイダン競馬場(ナドアルシバ競馬場のすぐ横に建てられた)近くにファルコンセンターという施設があるがそのあたりが昔は「ラクダレース場」で、調教取材の行き帰りに「こちらも調教へ行き来するラクダが道路を横断するのを待たせたりしたものだ。当時はアジアなどから「輸入」した子供をラ

クダレースのジョッキーにしていたのだがこれが人権団体から「ひどく怒られ、ラクダレースはその後、ムチの付いた口ポットが騎乗する制度になった。いまはラクダレース場が引越してしまっただけ見る機会もないが、中継を見るとラクダのオーナーたちが車で併走して口ポットのムチを操作しており、人を乗せていた当時よりもなにより楽しそうである。

その後ドバイは目覚ましい発展を遂げて世界中の耳目をひきつけるようになるのだが、この時代の未整備で怪しくてツッコみどころ満載のドバイはなかなか魅力的だったと思う。最近では発展しすぎてつまらないという面もある。

この当時を思い出してもうひとつ良かったなと思うのが、ワールドカップ開催の数日前にシャルジャの開催があったことだ。いまドバイワールドカップ取材と観戦に行っても1週間前での開催しか見られない(19年の場合、3月30日のメイダンの前は22日のジュベリアまで開催はない)が、01年まではワールドカップの2日前にシャルジャ競馬場の開催があり、観戦することができたのだ。

シャルジャはドバイと隣接した首長国。競馬場はシャルジャ空港の近くで、首長国全体の中でもドバイ寄りにある(ドバイの空港からだとして30分ほど)。近年改修したと聞いたが、資料写真を見る限り「スタンド増築した……のか?」程度。自治体にあるごく簡素な野球場・サッカー場のスタンド部分+αぐらいの感じだ。

コースはダートのみで、1周マイル弱の周回コースに、直線200mの長いシュートが付いている。乗馬施設と一体化しているのだが、全体の規模はあくまで「そこそこ」。周辺が全くなにもない砂地であり、砂だらけの土地にポツンと競馬場が存在している感じだ。もちろん馬券もなく、観客は小さなスタンドで馬が走るのを見るだけ。メイダンと違って派手な演出があるわけでもなく、レベルの高い馬が出てくるわけでもない。なにが楽しいのか?と「思っ」てしまわなくもないが、考えてみると「馬が走っているのを見て楽しむ」というのは競馬のいちばんシブい姿。余分なものをそぎ落とした競馬観戦を、20年近くぶりにしてみようかなとも思う。